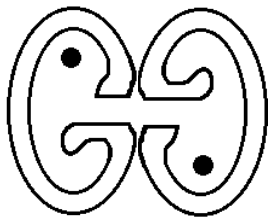


日本双生児研究学会ニュースレター



《第 52 号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2012 年 7 月発行

目次

第 26 回学術講演会特別企画 2 シンポジウム「東大附属のふたごたち」記録	2
論文・抄録紹介	8
岡嶋道夫先生追悼	
岡嶋先生の思い出	飯田 眞 9
故岡嶋道夫先生から頂いたおくりもの	永野貞子 10
The 14 th International Congress on Twin Studies に参加して	尾形宗士郎 11
書 評	志村 恵 12
日本双生児研究学会第 27 回学術講演会のご案内	13
日本双生児研究学会第 32 回研究会のお知らせ	14
総会・幹事会報告	15
編集後記	16

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00910-2-253840)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000 円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX 番号・E-mail 等をお書き添え下さい。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1 - 7

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

日本双生児研究学会事務局(早川和生)

TEL & FAX : 06-6879-2550

E-mail : hayakawa@sahs.med.osaka-u.ac.jp

<http://sahsweb.med.osaka-u.ac.jp/~jsts/index.html>

第 26 回学術講演会特別企画 2 シンポジウム「東大附属のふたごたち」記録

2012 年 1 月 28 日に東京大学教育学部附属中等教育学校を会場として開催されました第 26 回日本双生児研究学会学術講演会において、特別企画 2 シンポジウム「東大附属のふたごたち」が企画・実施されました。中高生のふたごと大人のふたごの 2 ステージが行われましたが、今回は前半の中高生の部の記録をお届けします。なお、なるべく発言に忠実に記録しましたが、一部の表記は編集担当の方で修正しています。

総合司会：特別企画 2、シンポジウム「東大附属のふたごたち」です。今日はそれぞれ学校で今過ごしている 3 年生 4 年生 6 年生（東大附属の場合、中学からの通算で学年を表記する。したがって、4 年生は高 1、6 年生は高 3 になる）の在校生なんですが、シンポジウムの協力いただいています。それぞれにいろんなことを聞きながら、シンポジウムを始めたいと思います。では司会の先生お願いします。

司会(以下司)：本日はご来場いただきましてありがとうございます。30 分という短い間ではございますが、在校生によるシンポジウムを始めたいと思います。私、東京大学教育学部附属中等教育学校の教員で、中田と申します、よろしく願い致します。今、左側から 6 年生 4 年生 3 年生っていう風に並んでおります。向かって左側が、A 児、いわゆる先に生まれたお姉さんお兄さんという風な配置になっています。これから本人たちから自己紹介をしていただきたいと思います。では 6 年生からお願いします。

A：6 年の石川彩乃です。よろしくお願いします。

B：6 年の石川雪音です。よろしくお願いします。

C：4 年の榎本海です。よろしくお願いします。

D：4 年の榎本陸です。お願いします。

E：3 年田中満帆子です。よろしくお願いします。

F：3 年田中佐保子です。よろしくお願いします。

司：それでは、時間も短いことですので、さっそく質問に入りたいと思います。まず、双子で良かったか、ということをお聞きしたいと思います。こう言うと、大抵は、双子でしか生まれたことがないからわからない、っていう風に返されることが多いんですけども、皆さんいかがでしょうか。じゃあ 6 年生からお願いします。

A：細かく思い返すと、まあ嫌だったこともあると思うんですけど、良かったことの方が多いです。

B：私もほとんど同じことを思っているんですけども、あまり嫌だなと思ったことはありません。はい、良いと思っています。

C：さっき先生が言ったように、実際はよくわからないんですけど、まあ、多分良かったと思ってます。

D：まあ、そんな感じです。良かったです。

E：私も双子で良かったと思います。

F：私も一緒に生まれてきて、行動、一緒にできて良かったと思います。

司：ありがとうございました。嫌だって言われたらどうしようかと思ったんですけど。それでは、他の兄弟との関係というのは、双子の相手との関係とは違う所ってありますか？あったらちょっと手を挙げていただきたいんですけども。

(B が手を挙げる)

B：二つ上の姉がいるんですけども、えっと、やっぱり双子の姉とはずっと一緒に過ごしてきて学校

もずっと一緒に、日々、ほとんど一緒にいるような気がしているので、(二つ上の)姉とはやっぱり、あの一、話すことも違いますし、感じる、ん？なんか、何て言うんだらう、話す内容も違ってくると思います。

C：5つ上の兄がいるんですけど、(その兄)は、だいぶ年が離れているので、一緒にいる時間とかも、すごい、相方(D)とは全然違いますし、話すことも全然違ってきます。

D：それでもまあ、仲良いんで、こう、自分的にはあまり変わらないとは思いますが。

司：それでは、今ご兄弟の話を伺ったんですけども、それぞれの時期にお互い双子であることをどういう風感じていたかってことを伺いたと思います。例えば、小さいころ、幼稚園・保育園時代ですとか、小学校、それから中学校・高校、っていう風に、比較的良かった時期、特に悪かった時期あると思うんですけども、ちょっと漠然としてるんですけども、6年生からお願いします。

A：記憶に残ってる限りだと幼稚園からなんですけど、幼稚園のころは、多分ずっと二人で一緒に行動していました。なので、仲が良かったと思います。それで、小学生になってから、小学生1、2年の時は幼稚園の名残で、多分一緒に行動することも多かったと思いますけど、3年生4年生になってから、お互い違う友達ができ、また性格でも違う行動を取ることが多かったと思います。5、6年生になってからも、そうですね、違う友達と遊んだりすることが多く、中学生になってからは、この学校が双子が多いということもあったせいとか、また一緒に双子同士でも仲良くなることもありまして、学校でも一緒にいることも増えました。

B：学校とかの生活は今姉が話してくれた通りなんですけれども、家では、ずっと一緒に過ごしてきたと思います。ほとんど、家の中でも、同じ時間を過ごしてきたと思うんですけども、やっぱり、その3、4年、小学校3、4年生から違う友達ができ、家でも少しお互い全てを話すといったようなこととかが無くなったりとか。あと中学生になってからも、あの、一時期そんなにお互いの話をするっていうことが無くなった時期もあったと思います。でも別にそれがお互いが嫌だったわけではない、という風に私は思っています。

C：幼稚園から小学校くらいの時は、やっぱり遊び相手っていうのがすごく大きくて、いつも一緒にいるから、一人で遊ぶんじゃない、ずっと二人で遊べる、そういう感じで、中学高校に入ってから、まあ、お互いそれぞれ別のクラスで別の友達ができ、まあ、二人で遊ぶってことは無くなったんですけど、あ、無くなったんじゃない、少なくなったんですけど、それでもまあ特に嫌だとかそういうことはなくて、まあ、楽しいです。

D：基本的にずっと、まあ、仲良いんで、いいんですけど、受験の時だけはちょっと片方だけ受かって片方だけ落ちたら、まあ、結構気まずいですし、受験の時は本当に嫌でした。双子であることが。それ以外はすごく、双子で良かったと思います。

E：小さいころ、幼稚園の時とかはほとんど、自分たちが特別だということは意識してなかったんですけど、小学生で、二クラスに分かれて、それぞれの友達ができ、相手の友達とも自然に遊べて友達の輪が広がったので楽しかったです。中学校に入って、勉強を教え合えるという関係になってから、すごく頼りになる存在ができました。

F：同じようなことなんですけど、幼稚園くらいの時まではあまり意識してなかったんですけど、小学校に入ってからちょっと意識されるようになって、時々まあ比べられることもあったのがちょっと嫌だったけど、でも、今まで振り返ると、双子で良かったなと思ってます。中学校に入っても、やっぱり友達もできたし、双子であることを誇りに思うようになって良かったなあと思っています。

司：ありがとうございます。それでは、ちょっとお伺いしたいんですが、今日皆さん着ていらっしゃる服は、ご自分で選んできましたか。

(皆うなずく)

司：はい。で、中学生高校生になるとそうだと思うんですが、幼稚園とか、それくらい小さいころって、

恐らく同じ服か、または色違いを着ていたと思うんですけど、そういったことで良かったなあとか嫌だったなあとありますか。

A：先生が仰っていた通り、幼稚園くらいまで、お母さんが決めたものとかを着ていたんです、着ていたので、おそろいものとかが多かったんですけど、小学生からは自分が着たいものをそれぞれ着るようになったので、おそろいの時もあるれば、自分たちが選んで全然違うタイプの服とかを着ることが、小学生くらいから多くなりました。そこからはもう、全然趣味も、あ、全然ではないんですけど、変わって行ったので、そこからは全部、服、着るものなどは変わって行きました。

B：あまり小さいころのことは記憶にないんですけども、多分私の方が、好きな色を選んで、姉の方に我慢をさせていたと思います。私は好きな色とかを取っていったので、そんなに記憶はないと思うんですけど、まあ、姉の方が、我慢したとかそういう思いはあったんじゃないかなと思っています。

C：幼稚園とか小学校低学年くらいの時は、まあ、同じ服だったり色違いが多かったんですけど、小学校中学年くらいから、すごい言いづらいんですけど、ちょっと身長差がすごい出てきたので、そもそも同じ服が着れなかったっていうのがあったんですけど。でもあの、服は特に意識してないんですけど、まあでもこういう時はできるだけお互いがわかりやすい服にしようってことだけは気にしてるんです。

D：言いたいこと言われちゃったんですけど、基本的にはだいたい同じ服を買ってもらってるかなって。まあ、身長差があるんで、あんまり同じ服は着てなかったと思います。

E：私たちも、小さいころは同じ服の色違いとかを着て、小学校から自分たちでだんだん選ぶようになったんですけど、同じ服を着るっていうのは、なんかちょっと面白さっていうのもあったから、自分たちでおそろいの服を着たりしてました。

F：自分たちで選んでも、趣味は結構似たような感じなので、同じ服とかを買うことが多いです。

司：私もあの、小さい双子がいるので、どうしても、同じ服を着せてしまうんですよね。やっぱりあの、見られた時に、可愛いって言われたいなっていうのがあったりするのと、あとは外に連れて行く時に同じ服を着ると、あ、双子だから気を付けてみてあげようって思ってもらえるのがあるので、ま、そういう所からもそうしたりするんですが、まあ、二卵性ということで榎本君たち(C・D)、ちょっと身長差の話がありましたけれども、そのことについては何かありますか。こう、嫌だったなあとか、逆にこう区別がついて良かったなあとか、いかがでしょう。

C：結構身長差があるんですけど、そんな自分たちは似てないと思うんですけど、それでもやっぱ、これだけ、今10センチ以上差があるんですけど、それでも、よく間違えられたりとかするんで、これで区別ができたとかそういうことはなくて、むしろやっぱ高い方は良いと思うんですけど、背が低い方はちょっと嫌です。

D：個人的にはまあ、面白いことを言う時には、あいつ(C)はチビだからって言うっておけば、まあ、怖くないというか、笑いを取れるので、個人的にはすごい気持ちいいです。

司：ありがとうございました、ちょっと今お話を聞いて思ったのが、石川さん、雪音さん(B)が、彩乃さん(A)のことを姉っていう風に言うんですけども、そういう意識って普段ありますか。

B：普段は無いです。無いんですけども、やっぱり今は話すために姉という言葉をちょっと使ってみました。

A：私は普段からあります。はい、そうですね、やっぱり、生活してても小さいころから何となくさっきも雪音(B)が言ったように、我慢するっていう、まあ意識は無かったんですけど、確か雪の方がそういう部分があったので、小っちゃいころから自分自身、私は雪よりも姉なのかなって意識は少しあったと思います。

司：同じ質問を二組にもお願いしたいんですが。

- C:正直言って無い。でも、すごい呼び方に困るんですよ。誰かに言う時、ま、(Dの)名前が陸なんで、あ、ぼくは自分で相手(D)のこと陸って言うんですけど、ま、誰かという時には、なんか双子の相方とか言われたり、片割れとか言われたり、兄弟の方とか弟の方とか、たまに間違えられてこっち(D)が兄なんて言われたりなんてあるんですけど。でも、呼ばれ方がちょっとよくわかんないんですけど、それでもやっぱ、兄とか弟とか、そういうのは無いです。
- D:こっちも特に兄弟はなくて、ま、さっきも言ったんですけど、5つ上にお兄ちゃんがいるんで、そのお兄ちゃんが兄で、で、この二人(C・D)は双子っていう区切りだと考えていて、ま、特に兄弟はあまり意識はしてないです。
- E: 私たちも、時々どっちがお姉さんとか聞かれることがあるんですけど、そういう時に迷っちゃうくらい意識したことは無いです。
- (F うなづく)
- 司: 同じですか。はい。えっと、田中さん(E・F)の所は、ご兄弟他にいらっしゃらないということなので、なおさらそうなのかもしれないです。あとはですね、世代によって親の扱いがちょっと違うってのもあるのかなって思います。多分あの、もう少し上の世代だと、おうちの人が、多分あなたはお姉さんだから、あなたは妹だから、あなたはお兄さんだからしっかりしなさいとか、そういうこともあるかと思うんですけども、あの、そういう風な兄弟としての扱いではなくて、親から受けた扱いで、親の人にしてもらって良かったこととか、これは嫌だったなあとか、あったら教えていただきたいんですが。ちょっとさっきも例として挙げましたけれど、一人が100点を取って、一人が60点だった、テストで。で、100点の方を、親は褒めればいいのか、自分に遠慮して褒めないのが嫌だったとかそういう風に、何か感じたことがあったら教えてください。
- A: 先生が仰っていたテストの点数などは、やはり中学生くらいから意識するようになったんですけども、もともと中学生くらいから私が理系で、雪音(B)が文系って言う風に自然と分かれていったので、あまり比べられるというような意識はせずに今まで来ました。なので、そういう点で嫌だなんていう風に思ったことは私はあんまりありません。ですが、例えば何かものをもらうとかそういう時に、雪音の方が多くもらってるじゃんみたいな時は、怒ったりはしたことがあったと思います。
- B: 私の母は、例えばお姉さんだから妹だからという風には扱ってこないで、ま、あの、上に姉がいることもあると思うんですけども、それぞれの性格を尊重して扱ってきてくれたと思っています。ですからそんなに嫌だなんて思ったこともないし、私は、その、姉とか妹とかを、その双子の間で感じたこともあんまり無かったんですけども、テストの点数とかも良ければ褒めてくれるし、悪ければ次頑張ろうねっていう感じだったので、お互いにそれはどっちもそういう態度だったので、嫌だなんて思ったこともないし、何か、比較されたという風に思ったこともほとんど無いです。
- C: うちの親の扱いは特にすごい良くて、お互いのことをよく理解してくれてると思ってます。で、あの比較されたりは、別にするんですけど、小っちゃいころからずっと、他の人よりも、親だけじゃなくて、他の人からも比較されたりはしてるんで。もうそういうことには慣れてるんで、慣れてるっていうのも変なんですけど、特にそういうのはあまり気にしないです。
- D: これは多分自分が悪いと思うんですけど、いつもあの、ふざけてるんで、相方(C)もまあふざけてるんですけど、大抵悪いことをしたら、親にどうせ陸(D)が悪いことやったんだろう、みたいなことを言われるのはちょっと嫌です。
- E: 良かったという点で、二人を比べないっていうのが、やっぱり良かったと思います。片方ができるのになんであなたはできないの、みたいなことを言われたらやっぱり嫌なのかなあという風に思います。
- F: 基本的に、私たちはまあ、成績とかも運動とかも、何かまあ、似たような感じだったので、特に特に比べられることも無かったので良かったと思います。

司：ありがとうございます。今、おうちの人の扱い、というようなことを聞いたんですけども、今度は、学校生活でですね、東大附属の中で良かったこととか嫌だったこととか、そういうのがあったら教えてください。

A：東大附属に入って良かったことは、やはり共感できる双子の友達ができただけで、すごく良かったと思っています。ですが、嫌だったことは、あまり無いんですけども、あの、例えば名前を間違えられて嫌がる双子もいるんですけど、私たちはそこまでお互いを間違えられることは嫌ではないんですけど、例えば性格とか、性質の、タイプの部分をひとくくりされて、石川姉妹はこういうタイプだよ、というような言い方をされる時は嫌だなという風に思うことはあります。

B：私も全く一緒です。石川姉妹って、普段の生活で普通に友達とおしゃべりしてる時とか普通に生活をしてる時に、急に何か二人、双子で、何か石川姉妹みたいな、ような感じでひとくくりされる時は、いや、二人は違う人間なのになんていう風には思うことがあります。なので、普段の生活では時々そういうひとくくりされた時の嫌な気持ちというのを、感じたことはあります。

C：東大附属で一番良かったことは、やっぱり何かさっき(A)と同じように他の双子と会えたというのがすごいあって、実際双子には会ったことあるんですけど、やっぱり同じ学年にあと10組以上も双子がいて、やっぱり最初に会った時はすごい驚いて、で、しかも、一学年に10組以上いるっていうのが、上の先輩とかも後輩もそうで、一度、何か双子の写真を撮ることがあって、学校中の双子を全員集めて写真を撮ったことがあるんですけど、やっぱりその時はすごい圧巻でした。嫌だったことは特に無いです。

D：小学校くらいからもう双子っていうのはやっぱり少なくて、学年に一組、自分たちしかいなかったんで、双子はどっちが頭がいいのとか、どっちの方が偉いみたいなことを聞かれたりして、ま、よく聞かれるんで、それがちょっと嫌だったんですけど、東大附属だと双子がいっぱいいるのが当たり前なんで、そんなこと聞いてくる人が少なくなったのがすごい嬉しかったです。嫌なことはまあ、時々間違えるのは、双子の呼び間違いをしちゃうのでそれだけはちょっと嫌です。

E：東大附属に入って、それぞれに友達ができると、一緒に遊ぶ時は両方一緒の時間が多かったので、共通の友達が増えたことが嬉しかったです。成績も大体同じくらいで、テストの点数で競ったりするけど、一緒に勉強することができるのですごい良いライバルっていう風になりました。

F：同じ感じなんですけど、特に友達は私たちの学年はみんな仲良くて、双子同士で仲良かったり、そのどっちかの友達と普通に接して遊べたりするのが嬉しいことです。あと、双子がいっぱいて、意識されるってことは、比べられるってことだと思うんですけど、それも全然無いし、一緒に、双子が、他の双子の人たちがどんな風に過ごしているのか、とか聞くことができるとても良かったと思います。

司：ありがとうございます。お話を聞いてるともともと、こう、聞きたくなってしまうのですが、そろそろ時間が近づいてきたので、じゃあ最後の質問をしたいと思います。お二人がどこが似ていて、どこが似ていないと思いますか。

A：似ている部分は根本的な考え方とか、やはり、さっきはくくられて嫌だって言ったんですけど、やはり性質とか性格の根本的な部分は似てるんだなという風に思います。友達の話とか、学校の話とかをしている時に、私はこうだと思うんだということを雪音(B)も共感してくれることが多いので、そういう、やはり性質の部分とかは似てるんじゃないかなと思います。似てない部分は、趣味とかそういうものが違っているという風に思います。

B：私もほとんど一緒の意見なんですけども、やっぱり似てないと思う部分は、趣味とか、あと、趣味とかも含めて好きな教科とかも違ってきますし、部活も違うので、何かを決める時なども異なったりすることが多いので、そういう部分は似てないのかなと思います。でもほとんどの性格とか感じ方とか考え方とかはすごく似てるので、話す時は必ず共感することができます。

C：二卵性双生児なんで、やっぱ先輩ら(A・B)と比べて似てない所は多くあって、今こう話してもキリがないと思うんですけど、やっぱり先輩らと同じように根本的な考え方はすごい似てると思うんですよ。二人ともせっかちで、よくあるんですけど、数学の問題とかで良く計算ミスするんですよ、お互い(C・D)。それで、全く同じ問題で全く同じ風に計算ミスをして全く同じような点数を取ることがたまにあって、やっぱそういう時はお互い双子だなあって思ったりします。

D：やっぱり二卵性なんで、ほとんど似てないんですけど、まあ、数学の間違いもそうなんですけど、解き方も、ここに補助線引いたっていう時も、あ、同じ所に引いたっていうのが、まあ、よくあったりして、あとはまあ、似ている所はまあ、お互いがお互いのことを似てないって思ってることはすごい似てます。

E：先輩方(A~D)と同じようなことで、似ている所は考えだだと思います。話していると、すごく話が合っていて、たまに同じことを言ったりします。似てない所は、思いつかなかったんですけど、あえて言えば、勉強の仕方がちょっと違って、コツコツタイプと一夜漬けタイプです。

F：まあ同じ感じで、似てない所っていうのは探してみないとそんなに見つからない。

司：ありがとうございました。もっと本当に色々お聞きしたいんですけども、時間が来てしまいました。それで、会場みなさんもお聞きしたいことがたくさんあるかと思うんですけども、一つか二つくらいだったら、時間が取れるかなっていう風を感じておりますので、ぜひこれを聞いてみたいって方がいらっしゃいましたら、ちょっと手を挙げていただきたいんですが、いかがでしょうか。じゃあ、今三名の方から挙手があったので、三人お願いいたします。

質問者1：今小二の男の子二人、双子の父なんですけども、双子と言ってもあの、小学校・保育園の先生にどうやって区別したらいいんですかといつも聞かれて困っています。実際に双子のたくさんいらっしゃる環境の中で、先生含めて、生徒さんたちもどうやって区別してるんだろうっていうのは非常に気になるんですけど、何かあるんでしょうか。コメントいただければと思います。

司：いかがでしょうか。恐らくその点については、次の卒業生のシンポジウムの所で教員の方は出てくると思うんでそちらに譲りたいと思いますが、どなたか、じゃあ時間が無いので一組だけ。

B：この後輩たち(C~F)はみんな私の同じ部活で、一緒に部活をしてきてたんですけども、まあ、二卵性の方(C・D)は全然に似てないのですぐわかるんですけども、一卵性は同じ部活に入ってきたら、なかなか覚えられません。で、みんなが多分東大附属で区別できるのは、クラスが違うからだと思っています。毎日同じ顔を見てると、自然と、違う方が来ても、似てるんですけどちょっと違うっていうのがはっきりわかります。ですから、ずっと二人で最初から過ごしているとあんまり、わかりづらい、あんまりよく区別することができないんじゃないかなあと私は思っています。

司：よろしいでしょうか。お願いいたします。

質問者2：いろんな双子の研究を私はやってるんですけども、最近チンパンジーの双子の研究をやったんですね。それですごくわかったのは、チンパンジーは双子っていう概念が無いんです。ですから双子が双子に見えない。で、それが分かれて、人間の双子ってなぜ双子なんだろうっていうと、本人が双子だからっていうよりは、周りの私たちが双子だっていう風な気がしているんですけども、まずそれに関連した質問なんですけども、自分が双子だっていうことが分かった時っていつごろで、それはどんな風に分かったものなのかっていうことと、それから、多くの双子の人たちっていうのは東大附属にいない人たちですよ、で、東大附属に入ったことによって多分他の方たちのような人たちとは違う経験っていうのが多分なされていると思うんですけども、その人たちから世の中の東大附属じゃない双子の人たちに何かこうメッセージ、こんなことは気にしなくてもいいんだよとか、双子同士で知り合うとこんなに面白いことがあるんだよとか、伝えたいメッセージが何かありましたら、お伺いしたいんですけども。

司：どのペアがよろしいでしょうかね。ございますか。

質問者2：今の質問で一番うまく答えがぱっと思いついた方。

(Aが手を挙げる)

司：じゃあ石川さん。

A：自分たちが双子だって思うようになったのは、記憶がある限りだと幼稚園ころなんですけど、やはり先生の言ってることが、双子ちゃんねっていう風に言ってくれるので、ああ、自分たちは双子で、似てて、みんなにとっては珍しく感じるものなんだっていう風を感じるようになったのが幼稚園ころだと思います。

司：じゃあ東大附属以外の双子へのメッセージということなんですけど、それは、じゃあ海君(C)お願いします。

C：正直言ってすごく難しい質問だと思うんですけど、やっぱり、東大附属以外の双子の人は、自分以外の双子をほとんど知らないと思うんですよ。だから、やっぱり双子っていうのは結構特別な存在だなんて思ったりするかもしれないんですけど、やっぱり実際双子ってすごいいっぱいいるんで、なんか自分たちが周りちょっと違うとか、双子が珍しいとか、そういうことは全然気にしなくていいと思います。

司：よろしいでしょうか。お願いいたします。

質問者3：同じような質問もう出ちゃったんで、先ほどあの、先ほどの方がその、お兄ちゃんとお姉ちゃんとかこれがなかなか区別しにくいって話をしましたけども、僕はわかると思ってて、今ここ二組、一卵性が並んでますけど、我々もそうだったし、もう一人これから藤田さんも出てくると思うんですけど、二人並べた時に弟とか妹の方が少し顔がふっくらしてるんですよ。これはみんな絶対そうなんで、僕なんかも見ててずっとここからこうやって見てても、それでどうしてなのかなと思うの。それから性格的にも少しお兄ちゃんお姉ちゃんの方がちょっと神経質で、まああの下の方はなんとなくお気楽にやってるっていうそういう、僕は弟ですから、そういう風にいつも感じてて、それで今日、お二人の双子さんを見てやっぱりそうだなあと、私の理論も確実だなということがわかりました。

司：はい、どうもありがとうございました。それではあの、在校生の部を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

論文・抄録紹介

Deaths from Twin-Twin Transfusion Syndrome in Japan, 1995–2008

Y. Imaizumi* and K. Hayakawa

Department of Health Sciences, Graduate School of Medicine, Osaka University

Keywords: Twin-twin transfusion syndrome; Concordance rate; Prevalence; Infant mortality; Birth weight discordance

Abstract

Objective: To estimate rates of fetal death, perinatal mortality, and infant mortality as well as the prevalence, concordance rates, and birth weight discordance attributed to twin-twin transfusion syndrome (TTTS).

Study design: These rates were estimated using Japanese Vital Statistics from 1995 to 2008. The total number of one or both members of a twin pair with TTTS was 1102.

Results: During 1999 and 2000, fetal death and perinatal and infant mortality rates related to TTTS decreased (48 per 10,000 births, 44 per 10,000 live births and fetal deaths after 22 weeks of gestation, and 16 per 10,000 live births, respectively) compared with those during 2007 and 2008 (31, 21 and 7, respectively). The fetal death rate was higher in male than in female fetuses. Furthermore, fetal death and infant mortality rates were the highest during gestational weeks 22–25; these rates decreased with gestational age and reached their lowest values at ≥ 38 weeks. Frequency of birth weight discordance $\geq 15\%$ was 82% among all subjects. The concordance rate was 44% (484/1102 pairs of twins), whereas the overall prevalence was 1.1 per 100 monozygotic twin pairs from 1995 through 2008.

Conclusion: Fetal death and infant mortality rates decreased with maternal age. The declining rates of fetal death and perinatal and infant mortality related to TTTS may be related to recent improvements in medical treatments for TTTS in Japan.

(Gynecol Obstetric 2012, 2:116. doi:10.4172/2161-0932.1000116)

追悼文

岡嶋先生の思い出

飯田 眞

岡嶋先生とお近づきになったのは私が先生の留学されていた当時の西独のミュンスター大学の遺伝学研究所に、半年遅れて留学することになったからです。この後も先生は指紋、掌紋、私は神経症と研究領域は異なるが、同じ双生児研究に関与していたからです。

先生は私よりも7歳も年長であり、私が東大医学部の学生の頃には法医学の助教授であった先生の講義や実習の指導を受けたりしていたので、不出来な学生の私にとっては立派な恩師の先生のお一人でした。

私が初めてドイツに着いたのは1964年の12月の末のことでした。アムステルダム着の予定だった私の飛行機が霧のため幸いにもドイツのボン＝ケルンの空港についたとき、防寒帽、防寒服に身を包んだ岡嶋先生が優しい笑顔で迎えてくださったときの感激を今も忘れることはできません。

その4ヵ月後、オーストリアのザルツブルクに隣接する南独の保養地バートライヘンハルのドイツ語学校でウィーンやインスブルックを訪れて遊びほうけていた私がミュンスターに戻り、研究所に入ったときには、岡嶋先生はご自分の研究室で拡大鏡に写された指紋や掌紋を熱心に観察しておられました。その姿に接したとき、私は一瞬緊張し、私の考えていた研究はこの研究所では不可能であることがわかり、半年後に同大学の精神科に移ることに決めました。この転科はその後の私の学問上の発展につながるようになりました。これは着実な研究を重ねておられる岡嶋先生の存在感が私も自分自身の研究を始めなければという自覚を促したからです。これもひいては岡嶋先生のおかげであると感謝しています。

生活の上では、値段の手頃な食堂に案内してくださり、メニューの読み方、注文の仕方などを教えてくださいました。先生はまたドイツの製品に傾倒しておられ、プンパニッケルというライ麦パンを推奨された時は、胃弱とうかがっている先生の胃が大丈夫かと案じた程です。ドイツ製品には合理的なもの

が多く、帰国の時には先生から教えられたゾーリングゲンの双子印のナイフや鋏が私の帰国のときのお土産として役立ちました。時代が下って1981年の暮れ、新潟大学の精神科の教授として赴任することになった時、真っ先に拙宅にお祝いに来られたので驚きました。今から思うと、当時の新潟大学の医学部長は法医学の方でしたので、先生が個人的にご推挙してくださったのだと思います。かげながらのご配慮に感謝しています。

私が新潟大学を定年でやめる2年前(1993)に、双生児研究学会をひらきました。その時特別講演に岡嶋先生をお招きしました。先生は「皮膚紋理の遺伝と発生—双生児研究から近交系動物への道程」という演題で、先生の生涯にわたる皮膚紋理研究の発展の歴史を語られ、私ども聴衆に深い感銘を与えました。

私が先生のお役に立ったことは少ないのですが、先生からのお願いで、お嬢さんを臨床心理の勉強かたがた私の医局の研究会にお誘いしたことがあります。当時の医局は若い医師であふれていましたので、医局の若い人たちどうして楽しい時間をもたれたようでした。

一昨年、井上先生のご逝去をお知らせした電話で、先生は「私も肺がんで限られた命なのです」と淡々と話されました。井上先生のご葬儀でお会いしたのが最後で、その後まもなく奥様から先生のご逝去を知らされました。先生らしい、他人を煩わせない、簡素なご葬儀だったとうかがっております。私は先生から受けたご恩が大きいだけに先生への感謝の気持ちを先生のご霊にお話かけたく思っておりますので、このたび先生への追悼文を書かせていただき心の荷を降ろしたような気持ちです。先生の学者としての理想像を具現された人生、学究としての厳しさの内面にあるおだやかで優しいお人柄を偲びつつご冥福をお祈りし、私の追悼の言葉と致します。

2012. 4. 10.

故岡嶋道夫先生から頂いたおくりもの

永野 貞子

岡嶋道夫先生と畑違いの私は直接のご指導は受けておりませんが、研究に、教育に多大の贈りものを頂きました。日本双生児研究学会を通してのものとその他の時に頂いた状況を思い出し乍ら、先生のご遺徳を偲び、追悼の意を表したいと思っております。

私が双生児である事と、井上英二先生と岡嶋道夫先生のお名前に惹かれ、当学会に入会致しました。ニュースレター2号(1982)の誌上で父の谷口虎年からの双胎の文献がないことを書きました。早速岡嶋道夫先生から多数の双胎の解剖学的研究の文献が送られ、心あたたまるご好意に感激致しました。

次の贈りものは日本双生児研究学会の懇親会場です。会員の多数出席の中、岡嶋道夫先生と2人だけの機会があり、開口一番「父とは専門分野は異なったが、皮膚が同じ研究対象です」と。ご尊父の岡嶋敬治先生は慶應義塾大学医学部創設に当り、初代解剖学教授として大正7年(1918)に赴任されました。私の父は岡嶋敬治先生のお人柄に惹かれ、学生時代から両生類の実験発生学の研究をさせていただき、卒業後入室しました。教授の研究テーマは皮膚およびその付属器で、多くの教室員の方達と共に研究を始めました。しかし父は教授に内緒で双胎児の解剖学的研究を行っておりました。双胎研究でドイツ留学中、昭和11年4月1日に私の姉と双胎児の妹の死が知らされ、3人目(私)もあぶないという電報を受けました。4月9日の電報はあけることが出来ず、下宿先の方にあけて頂きました。それは岡嶋敬治先生が脳卒中で危篤の電報、引き続き訃報が届き、敬治先生54才、道夫先生は12才でした。ご遺言により岡嶋敬治先生は骨格標本として標本室に、又現在は戦災で唯一残った同じ標本室に私の父の骨格標本

と一緒に安置されております。70年以上の前の出来事を話しながら私の研究内容に触れました。父は当初私に脳の研究をするようにと東大脳研究施設の解剖学部門で勉強させていただきました。この時草間敏夫教授から井上英二教授を紹介され、私の顔は谷口虎年の顔にそっくりとおっしゃられました。猫の実験に入ると私の学問的未熟さのため挫折しました。現在の研究は異常な形態をもつ単胎児と双胎児の解剖学的研究と比較検討していることを述べました。道夫先生は「父親の亡き後に親と同じ研究対象で研究を行なっている私達2人に、骨格標本のお二方は何と解釈し、どう評価しているでしょう」。共に父親似の顔貌の私達2人と2人の親である骨格標本のお二方も夢のような四者会談のひとつのおくりものでした。

最後の贈りものは、岡嶋道夫先生の世界的な新発見である皮膚紋理検査法による動物の手の標本とヒトの手の標本についてです。1970年後半、東京女子医大解剖学教室において動物の手の標本を直接手にとってみせて頂きました。標本の精緻さに感動をおぼえ、標本作製への情熱を私は体全体で受けました。

ヒトの皮膚紋理検査法による貴重な研究成果の一端は新版岡嶋解剖学(1986)に加筆して下さったことです。皮膚小稜上の汗孔が白点として多くみられる写真と各種の指紋の写真です。指紋は古い用語で、新らしくは皮膚紋理学であると記述されています。系統解剖学を学ぶ医学生生の教科書である岡嶋解剖学は岡嶋敬治先生の亡きあと谷口虎年が改訂版とし、昭和47年絶版となりました。再び新版岡嶋解剖学として原著出版から53年を経て教科書が出版されることは極めて異例なことです。CT、MRI、血管造影、超音波等による画像診断が臨床各科で利用されている現在、日本人の人体構造の知識は臨床医に幅広く求められています。千頁近い原図は私の頭の中にしっかり入っています。学生実習への指導書として長く愛用させて頂きました。卒後臨床医になった医師に、出来る限り解剖学の知識を指導しています。この岡嶋解剖学は私にとって生涯忘れることのできない最高の贈りものでした。

教育に、研究にとたくさんの贈りものを頂くだけでした。岡嶋道夫先生には何のお返しも出来ず、追悼文を記すのみでお許しを乞う次第です。岡嶋道夫先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

The 14th International Congress on Twin Studies に参加して！

尾形宗士郎(大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻)

2012年4月にイタリアのフィレンツェで開催された International Congress on Twin Studies 及び同時開催された The 2nd World Congress on Twin Pregnancy に参加し、自分の研究成果について口頭発表しました。初めての国際学会での発表でしたので非常に緊張しましたが思い切って発表でき、会場から笑いと拍手も得られたことから気分的にホットしたので、その感想と報告をさせていただきたいと思っています。

フィレンツェは国際的に有名な歴史都市であり、町並みは大変美しいものでした。学会のオープンセレモニーでは、フィレンツェ市長が来られて挨拶もされました。

学会には世界中から研究者が積極的に参加し、開催国のイタリアはもちろんのこと、イギリス、スウェーデン、フィンランド、ルーマニア、スペイン、オランダ、オーストラリア、アメリカ、韓国など大変数多くの国々から参加されていたのが印象的でした。

今回の学会で発表された研究は、双子妊娠の産科的問題について、多胎妊娠における疫学について、双子の新生児を育てる上での問題について、遺伝疫学(Genetic epidemiology)について、ガンの遺伝疫学における新しい知見について等、その他多くの研究が発表されました。これらの研究は医学の発展や双子を育てる家庭にとって重要な知見となると考えられ貴重な研究が発表されていることを実感として理

解することができました。

また、非常にユニークな研究発表もありました。例えば、ユーモアスタイルの個人差における遺伝および環境の影響についての研究です。その研究によるとオーストラリア人を対象とした場合は、ユーモアスタイルの個人差は遺伝と非共有環境による影響と報告されていました。この結果はイギリス人を対象にした結果と同じだったのですが、アメリカ人を対象にした結果とは異なっていたみたいです。文化グループによって、ユーモアスタイルの原因は異なるのかもしれないという報告でした。

双生児研究法は個人の遺伝的かつ環境的な背景を考慮したり、また遺伝・環境要因のそれぞれの影響の程度を推定したりして、他の手法では得ることが難しい質の高い予防医学・保健学のエビデンスの解明を可能にしてきました。今回の学会に参加することで、双生児研究法は医学的にも社会的にも意義の高いものであるということがよく理解できました。今後も双生児研究によって多くのことが解明され、将来を含め非常に幅広く数多くの人々に貢献できることを強く確信できたことは大きな収穫になったと思います。

書 評

小島 潤子『双生児の内的世界Ⅱ 自己[セルフ]と影[シャドウ]』文芸社、2011年

評者：志村 恵

「ふたごの語る《双生児》と《分身/鏡像/半身》の物語」との副題を持つ本書は、著書自身が一卵性の双生児である小島潤子の「双生児の内的世界」を扱った2冊目の著書である。本書は、「TAT 物語調査」特に 9GF 図版及び白紙図版による双生児の心理分析を扱った前半と、著者の得意とするマンガに現れた双生児への分析を扱った後半との二部構成である。

継続して双生児の心理的側面に焦点を当て続けている著者の粘り強さと、マンガという分野にもその研究の射程を広げている意欲に敬意を払うとともに、本書では、子育てに対する示唆も今までになく強く打ち出していることに共感を覚えた。「一卵性とは言え、自然に生じる二人の間の何らかの差異を、無理なくまるやかに認め、それぞれをそれぞれに受け止めてあげること」「そっくりと評されやすい一卵性双生児二人に対して、違う点や似ている点に過度にとらわれた反応をするのは極力避け、一人一人の人間としての個性を大事に扱おうと努力することが大切」「二卵性双生児に関しては、二人が《双子だけど“似ていない”という個性のあり方》をうまく取り扱うこと、そして同時にそうした二人に《自然な一体感を持たせるような配慮》が大切」などのことばは、多くの双生児が思わず「その通り」と叫びたくなるものであろう。多くの研究においては数字の一つになってしまう生身の双生児の気持ちに心を寄せ、意味でも、多くの多胎研究者に一読を勧めたい。

日本双生児研究学会 第27回学術講演会のご案内

日時：2013年1月26日（土曜日） 午前9時30分～午後5時30分

会場：慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 北館

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

アクセス地図：<http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html>

後援：慶應義塾大学・論理と感性のグローバル研究センター／三田哲学会

1. 講演会の概要（予定）

① 一般演題①：9:30～11:00

② 特別講演：11:00～12:00

演者：Joon Sung 博士（ソウル大学公衆衛生大学院准教授）

演題："Study Design and Gene Mapping Results from the Korean Twin-Family Study"

(Keywords: twin research, gene mapping study, complex diseases and traits, genome-wide association study)

★ 昼休み・幹事会：12:00～13:30

③ 総会：13:30～14:00

④ 特別ジョイント・シンポジウム：14:00～15:30

「日本の双生児研究のこれから—東西”ふたご”リサーチセンターの試み」

企画：慶應義塾ふたご行動発達研究センター

大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター

⑤ 一般演題②：15:30～17:30

（懇親会 17:30～19:30）

※託児所の設置については現在検討中です。決まり次第、会員メーリングリストにてお知らせいたします。

2. 研究発表の申し込み

発表・報告いただける方は、演題名、発表者名、全員の所属および発表要旨（600～1000字程度）を、A4用紙1枚にまとめて、郵便、またはメールに添付して下記送付先までお送りください。この要旨原稿は、原則としてそのまま抄録集の印刷用原稿として用います。

【締め切り】2012年11月9日（金）（必着）

【送り先、およびお問合せ先】

慶應義塾大学文学部

日本双生児研究学会第27回学術講演会大会事務局 安藤寿康 宛

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

E-mail：twins27@kotrec.keio.ac.jp

TEL：03-5427-1180

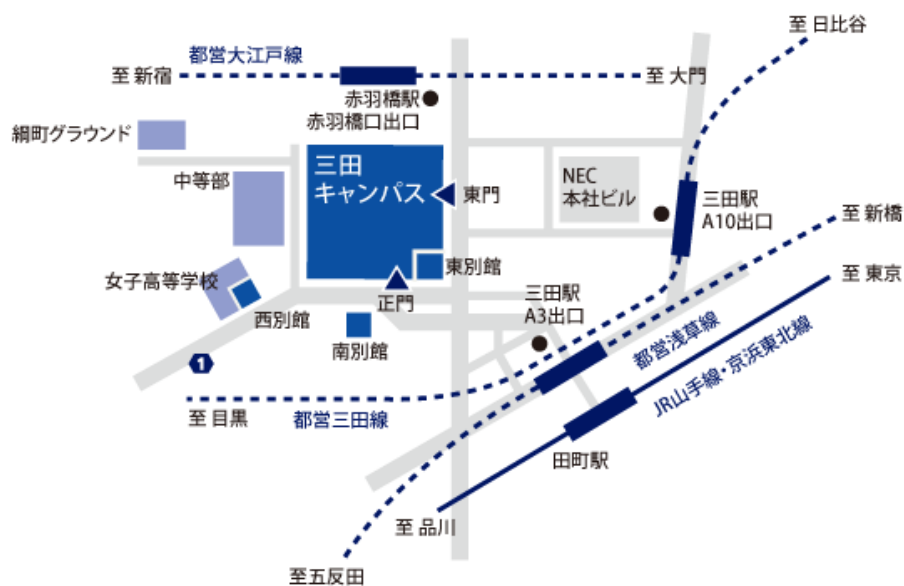
3. 会費について

参加費：会員 2,000円

双生児の父母・研究協力者 500円（資料代実費、1家庭当たり）

懇親会費：3,000円(事前申し込み)

4. 交通のご案内 (ウェブサイトも併せてご覧ください)



日本双生児研究学会第32回研究会のお知らせ

日時：2012年10月13日(土) 13:00-15:00

場所：慶應義塾大学三田キャンパス(会場は当日案内板にて)

演者：山形伸二(大学入試センター 入学者選抜研究機構 特任助教)

演題：「双生児研究はいかに遺伝と環境の影響を明らかにするか」

総会・幹事会報告

2012年日本双生児研究学会幹事会・議事録

日時：2012年1月18日 13:10～14:00

場所：東京大学教育学部附属中等教育学校 南校舎1階応接室

出席：安藤寿康、大木秀一、志村恵、杉浦祐子、菅原ますみ、野中浩一、早川和生

欠席：小野寺勉、加藤憲司、加藤則子、横山美江

議題：報告事項：

1. 平成23年の活動報告

1) ニュースレターについて (第50号、第51号)

2) 会員状況報告 (現会員数141名：入会者7名、退会1名、名誉会員8名)

3) 研究会 (第31回) について

4) 日本双生児研究学会奨励賞受賞候補者について

応募締切日までに推薦のあった候補者1名 (福島昌子氏) について奨励賞審査委員会において慎重審議し、奨励賞の授与が適格であると判断されたことが早川会長より報告された。

2. 平成23年の会系収支報告及び監査報告 (別紙)

3. 平成24年の活動予定について

1) 第27回学術講演会について

2013年1月に開催予定の第27回学術講演会長として安藤寿康幹事 (慶応義塾大学教授) が推挙され承認された。

2) ニュースレターの発行について

志村編集担当幹事より第52号及び53号の発行予定と報告された。

3) 第32回研究会について

審議事項：

1. 平成24年の予算案について (別紙)

事務局から提案された平成24年予算案について審議され承認された。

2. その他

2012年日本双生児研究学会総会

日時：2012年1月28日

場所：東京大学教育学部附属中等教育学校 南校舎2階大教室

議題：報告事項：

1. 平成23年の活動報告

1) ニュースレターについて (第50号、第51号)

2) 会員状況報告

3) 研究会 (第31回) について

4) 日本双生児研究学会奨励賞授与候補者について

2. 平成23年の会計収支報告及び監査報告 (別紙)

3. 平成24年の活動予定について

1) 第27回学術講演会について

2) ニュースレターの発行について

3) 第 32 回研究会について

審議事項：

1. 平成 24 年の予算案について (別紙)
2. その他

日本双生児研究学会 平成 23 年 (2011.1.1~2011.12.31) 会計収支報告

収入		支出	
前年繰越	1,801,785	ニュースレター印刷費	238,001
会費収入	460,000	ニュースレター郵送費	26,022
うち平成 19 年度分(1 名)	3,000	ニュースレター編集費(2010,2011 年)	60,420
平成 20 年度分(7 名)	21,000	幹事会費用	12,810
平成 21 年度分(11 名)	33,000	第 26 回学術講演会援助費	100,420
平成 22 年度分(44 名)	132,000		
平成 23 年度分(89 名:1 名 ¥1000)	268,000		
平成 24 年度分(1 名)	3,000		
利子	426	次年繰越金	1,824,538
収入合計	2,262,211	支出合計	2,262,211

以上、相違ありません。 平成 24 年 / 月 20 日

監査 榎 知里 (印)

監査 浅見 恵梨子 (印)

日本双生児研究学会 平成 24 年 (2012.1.1~2012.12.31) 会計予算案

収入		支出	
前年繰越	1,824,538	ニュースレター印刷費	130,000
会費収入		ニュースレター郵送費	20,000
85 人 (131*0.65)*¥3000	255,000	ニュースレター編集費	30,000
過年度会費 20 人*¥3000	60,000	講演者謝金	20,000
利子	400	講演者交通費	50,000
		研究会会場使用費	5,000
		通信費	5,000
		会議費	2,000
		第 27 回学術講演会援助費	100,000
		奨励賞関連費(賞金、賞状など)	56,000
		消耗品費	5,000
		次年繰越金	1,716,938
収入合計	2,139,938	支出合計	2,139,938

編集後記

段々暑くなってきましたが、会員のみなさまにはお変わりなくご健勝のことと存じます。第 26 回学術講演会の特別企画の記録を中心として編集した『ニュースレター』をお届けします。また、第 27 回学術講演会(大会長 安藤寿先生)の案内を掲載しております。みなさま、第 27 回学術講演会に奮ってご参加ください。特に、演題をお寄せいただけるようお願いいたします。

編集委員 志村恵(金沢大学) 横山美江(大阪市立大学)